

大分県立病院小児病棟でのボランティア

仲野 誠（大分大学）

最近2回ほど県立病院でボランティアをさせていただく機会があったので、そのことを報告します。実はそのきっかけは5年前までさかのぼります。その頃、天文教育普及研究会の中にユニバーサルデザインWGというグループができました。主として障害者やいわゆる社会的弱者に対しても天文普及をやろうではないか、ということで提唱されて始まったWGです。私も日頃、このようなことに興味もあったので、それに刺激を受け、自分でも何かできないだろうかと考えました。大きな病院の中には院内学級という長期療養が必要な子どもたちのための学級があることを知ったのもその頃です。早速そのような病院で、私にも天文学普及のようなことができないかと考え、県内の3カ所ほどの拠点的な病院にメールでボランティアを受け入れる意向の有無を問合わせてみました。その時に返事が返ってきたのは県立病院だけでした。しかし、その内容は、院内学級の生徒は2人しかいないこと、また参加できるかどうかは、その日にならないと体調の関係で分からないこと、夜の行事であれば、少人数の看護体制で、患者の管理問題があることなどが書かれていました。ということで、このようなボランティアが入るのはなかなか難しそうだといいことで、あっさりと言壁に当たってしまいました。ただメール最後に「観望会はできないということではありませんが…」と書かれてはいたのは救いでした。そしてそのまま4年が過ぎたわけですが、ある朝大学のグラウンドでトレーニング中の



当会の柏木さんに偶然お会いしました。聞けば、中学校教員として院内学級を担当されているとのこと。早速、以上のようないきさつがあったことなどをお話して、再度可能性を聞いていただくようお願いしてみました。すると、しばらくしてから県立病院の保育士さんから、ボランティアを是非

お願いしたい旨のメールが届きました。私が以前出したメールのこともご存知で、以前はボランティア担当の職員を病棟に配置していなかった関係で、責任を持って

受けられなかったことなどを詫げる言葉が続いていました。早速病院で打ち合わせを行い、今年やっと実現したというわけです。



さて、当日利用させていただいたのは院内にあるプレイルーム。絵本やおもちゃ、ピアノなどが置かれた共通スペースです。きれいな天体を見せたかったために部屋をできるだけ暗くしたいという要望を出したので、この部屋の光の入りそうな部分はすべて黒のビニールで目張りまでしてもらっていました。何人来るかは当日になるまでわからないということだったので、本当に来てくれるか心配でしたが、点滴スタンドを引

っ張ったり、車いすに乗った子どもたちや付き添いの親たちが三々五々集まってきました。1回目(2011/6/29)はまず、「シロナガスクジラより大きいものっているの?」という評論社の絵本をパワーポイントにして見せながら、クイズを交えて地球や太陽の大きさなどの話をした後、デジタル宇宙ビューワであるMitakaを使って太陽系の話をしました。療養中のせいもあってでしょうが、通常よりも反応は低いように感じましたが、それでも熱心なまなざしを送ってくれている子どももいました。話の最後には「おみやげ写真」ということで、ネット等で公開されているきれいな天体写真を印刷したものを配りました。それをきっかけに写っている問われるままに天体の説明をしたりして、無事終了しました。2回目(2011/10/25)も最初は小さな子どもが2人だけという状況でしたので、まずは読み聞かせ(「まるまるのほん」谷川俊太郎)から始めました。そのうち院内学級の終わった小学生も加わってきたので、「ハヤブサのおはなし」をしました。続いてハイパー・テレスコープ(おもちゃメーカーのバンダイの製品で向ける方向にしたがって見えるはずの星空を直接のぞいて見たり、TVで見ることができる)で天体観察の模擬体験をしました。特にこのような場面で、このようなおもちゃも大活躍しました。なんとってなかなか外に出ることのできない子どもたちが、病院の壁を通してその向こうの星空を見ることができるのです。最後はやはり前回評判のよかった「おみやげ写真」。実施の時間はいずれも1時間半程度で、参加者数は保護者や研修医、看護師さんを含めて15名程度というところでしょうか。実際の患者の子ども数はその1/3くらいです。ただ体調や検診との関係もあって、参加者の途中の出入りは結構ありました。また子どもの年齢層も学齢前の小さな子どもから中学生までさまざま、こちらの柔軟な対応の必要性を感じました。ただ、ここにも天文に随分詳しく熱心に質問をしてくる子(中学生)がやっぱりいたのはうれしかったです。

この2回の経験を通して私が感じたことは、保育士さんのような患者とボランティアとの仲立ちをする人の重要性です。このような方が配置されている病院は多くはないそうですが、このような方がいないと外部からのボランティアに対応し、それなりの満足感を患者さんに与えることは難しいと思いました。研修医や看護師さんも積極的に参加してもらいましたが、子どもたちの広い年齢層に対応するのはやはり易くはありませんでした。年齢層で分けて、前半と後半で切り分けるようななども考えたのですが、そのようなことが許される状況でもありませんでした。また子どもよりむしろ閉鎖的な空間で暮らさざるを得ない親などの付き添い方が癒しを求めていることも、終了後の保育士さんとの話から伝わってきました。視覚的に臨場感が味わえる Mitaka やハイパー・テレスコープなどは「おー」と多くの声が自然と出てくるくらい大変喜んでもらえたので、これからの「飛び道具」を有効に利用できる内容を考えてゆきたいと思います。現在は病棟からでも外の見晴らしがある程度確保できる場所もあることがわかってきたので、来年は天体望遠鏡を持ってきて室内からの天体観測も試してみましよう、と保育士さんと話しています。



ハイパー・テレスコープ（バンダイ）